

2013年12月末、東ティモールのスタディツアーへ出かけました。今回は産婦人科医の佐藤いずみさん、滋賀県にお住まいで2回目の参加になる山本勇造さん、岐阜大学教育学部の赤塩健太さん、医学部の尾崎真人さん、長瀬大さん、松浦有佑さんの6名が参加。ファトボル村やHOPEの子どもたちとも交流ができ、楽しい学びのひとときとなりました。参加したみなさんの報告とともに、現地の様子をご覧ください。



- 【スケジュール】
- 1日目：深夜に羽田空港を出発
 - 2日目：バリ島を経由して東ティモールへ
オリエンテーションなど
 - 3日目：ファトボル村へ、巡回診療に同行
 - 4日目：パイロピテ診療所の診察を見学
青年海外協力隊のみなさんと交流会
 - 5日目：ディリ市内観光
孤児院「HOPE」にて交流
 - 6日目：パイロピテ診療所の診療を見学
青年海外協力隊の活動地を見学
 - 7日目：ディリを出発
 - 8日目：朝、成田空港に到着

スタディツアーに参加したみなさんの感想をご紹介します。

❖ 豊かさとは

私が東ティモールに行って一番印象に残ったものは無医村のファトボル村を訪れたことです。街から遠く離れた高い山にある村に飲食店やスーパーなどあるはずもなく、家庭に車はなく、まず電気が通っているかも怪しい場所で、来た直後この生活水準で暮らせるのかと疑問でした。

松浦 有佑



携帯電話もコミュニケーションツールになる

しかしそこで現地の子どもや若者と触れ合って、私は幸せってなんだろう、人の根本ってなんだろうということを考えさせられました。彼らは本当に素敵な笑顔をしていました。そして強い強いパワーやエネルギーを感じたのです。スポーツひとつでこんなに盛り上がるのかというくらい楽しんでいました。もちろん、医療の面では診察を待ち望んでいる人はたくさんいたし、外部からの援助も必要な状態ではあります。しかし基本的には村の中



キリスト像の立つ岬にて

で生活が成り立っていて、その中で家族や村人との結びつきの強さを感じました。愛する家族がいて、遊ぶ友人がいて、住む場所がある、これが彼らにとって何よりも大切な事、幸せであることなのではないのかと感じました。

私たち日本人はファトボル村にないものが山ほどあって、どこにでも行けるし、好きなだけ食べられるし、手に入れたいものは大

体手に入る環境にあります。しかし、ものの豊かさというのは、ときに知らず知らずのうちに人間として大切なものを覆い隠してしまっているのではないかと思ったのです。私はここで、素直な気持ちでまっすぐに人と向き合うことの大切さ、家族や友人に支えてもらっていることへの感謝、を改めて思い出したような気がします。幸せを求めてばかりだけど、自分にはもうあったんだ、と気付きました。

このツアーは、いい意味で自分を壊せたのではないかと感じられる一週間でした。

❖ 東ティモールの保健衛生から考えた国際協力

尾崎 真人

東ティモールでの現状は出生率が5・7と高いのだが乳児死亡率が高く、多産多死になっていました。実際に出会う妊婦さんは、特に田舎では流産も合わせると二桁妊娠回数があり驚きでした。また、逆子や前置胎盤などの、エコーなど（アイダは携帯していた）の比較的簡単な検査で発見でき、かつ適切に治療や管理すればより安全性を高められる病態に対しても、機材や知識がないためにフォローできていないことが見られました。



妊婦さんの超音波検査
充電式なので村でも大活躍

これに対しフロントラインは現地住民を助産師に育成していました。これも先輩ママた

ちのアドバイスと協調して活動してもらうのは苦勞があるなど想像できました。生新しい知識よりも十数人も出産してきた先輩ママの言葉の方が説得力あるのでしょうか。従って、ムラで培ってきた知識に西洋医学が介入する場合、見に見えるメリットが現れるまでは受け入れられるのは難しいのだとここでも感じました。現地の方の「(今までそれでやってきたから) そういうものだ」という意識が国際協力を遠ざけているのかもしれませんが。



ティモールの子どもたち

ただ、先進的な医学の知識なしで生活し、今までその現状に「納得」もしてきたはずです。ティモールの人々は不幸ではないのです。技術がないから不幸だと決めるのは外部のエゴかもしれませんが、彼らなりの満足をしてきたと思います。そこに私たちの価値観を押し付けて近代化を進めるのは違うのだと思います。そういった支援者の意識では、現地に知識が受け入れられるのを待つ余裕もないと思います。

国際協力は現地の幸福の形を感じながらそれを活かして、じっくり待ちながら行うものだと知ることができました。また、幸せの形がそれぞれであることを肌で感じ、自分の生き方や人生も考えることができました。

❖ 願いと決意

赤塩 健太

社会科の教員志望で、将来的に海外の教育に関わった仕事をしたいと考えている僕にとって、「日本ではポジティブなイメージの薄い東ティモールとは実際はどのような国なのか？子どもたちの実際は？」ということが最大の関心でした。前者の関心は幅が広すぎるため、ここでは書けませんが、後者の関心についてまとめようと思います。

単刀直入に言うと、東ティモールの子どもたちは驚くほどの元気と明るさ、笑顔を持っています。今回、たくさん子どもたち(もちろん大人の方々



いつのまにかなかよしに

も)と関わる機会をいただきました。どんな遊びにも本当に楽しそうに、全力でやり尽し、純粋で率直に感情を表現してくれる彼らを見て、僕も素直に楽しかったし「こんな素敵な子どもたちと関わっていける教育に、一生関わって生きていきたい」という思いが強くなりました。



無邪気な子どもたち

ですが、東ティモールでは教育面において、様々な要因から多岐にわたって問題を抱えていることも知りました。今回のツアーでお会いした青年海外協力隊の方の一人が「生まれが違うだけで、様々な選択肢が与えられている人生と、多くの選択肢を得にくい環境にいる子どもがいることに納得ができない」とおっしゃられました。東ティモールと日本の子どもたちのどちらも将来に同じ可能性が必ずあるはずですが、結果はどうあれ教育の機会は平等であってほしい、

というのが僕の願いであり、将来の目標です。今までまとまらず、言葉にならなかったこの思いが明確になったツアーでした。

なんとも漠然とした目標で、これから何をすべきか正直なところ、自分なりの明確な答えはありません。ただ僕の目標が明確になるきっかけとなった、今回出会ったすべての方々にこれから答えを示していこうと決意しています。

❖ 実感した国際協力の魅力

長瀬 大

東ティモールでは、現地の無邪気な子どもたちや青年海外協力隊の方々など、色々な人との印象的な出会いが数多くありました。特に、紛争などによる様々な困難に直面しながらも自ら道を切り開いてきたアイダ医師や、長年献身的に活動続けるダン医師の生き方、信念、強さには心打たれるものがありました。そして、この二人の医師を長年応援されてきた桑山さんが彼らについて、「国を応援しているんじゃない。人を応援しているんだ。」と繰り返し仰っていた言葉が、また非常に印象的です。こうした方々の想いに触れたことで、私自身も今まで多くの人に支えられて、応援してもらってきたからこそ今があることへの感謝を改めて感じ、初心に戻って、純粋な気持ちで自分自身を見つめ直すきっかけにもなりました。そして同時に、将来、今度は自分が誰かを応援するという桑山さんのような生き方も素敵だなと感じました。



結核病棟にて。予防用のマスクをしてダン先生の説明に耳を傾ける

バイロピテクリニックの診療やファトボル村での妊婦健診では、ダンやアイダ、桑山さんに色々なことを教えていただいたり、様々な患者さんを診させていただいたり、非常に勉強になりました。ただその一方で、医療資源の不足や、栄養・衛生面の問題から日本ではまずみられないような感染症が蔓延していることや、子どもの白血病などの日本では多くの場合治るはずの病気でもなかなか治療を受けられないこと、日本では当然行うであろう必要な検査を受けられないなど、東ティモールでのショッキングな現実も数多く目の当たりにしました。同じ病気を抱えていても、日本とは受けられる医療、サポートが大きく違い、健康に大きな差が生じてしまう実情には考えさせられるものがありました。

このスタディーツアーを通して、リアルな国際協力の現場を体験させていただきました。ゼロから現在の活動を築き上げ、国際協力の世界で日々走り続けておられる桑山さんの長年の歩みを知れば知るほど、「見て見ぬふりをしない」という桑山さんのまっすぐな想いに



ファトボル村の子どもたちと

感銘を受けたとともに、より一層の尊敬と憧れを抱きました。「人が変わり、自分が変わる。人の変化が自分の喜びになる。」そう桑山さんが仰るように、国際協力が持つたくさんの魅力を教えていただき、そうした活動も素敵だな、自分もいつかやってみたいとより感じるようになりました。実際に行うのは口で言うよりも非常に難しいことなのだと思いますが、この先どこかで国際協力に携われるチャンスを模索し続けていきたいと思います。

❖ 2度目の東ティモールへ

山本 勇造

今回私は、やはり出会いを楽しみにしていました。ディリの国際空港で出迎えてくれたのは、医師のアイダと運転手のサビーヌの二人でした。ここからいよいよ始まりです。

バイロピテクリニック～ 車を降りて笑顔で近づいてくれたのは、清掃担当のアンゴラ。すっかり忘れていましたが、私のことを覚えていてくれたのです。再会を喜んでくれてい～これがやはり一番や～と感動の始まりで



美しいティモールの海岸線

す。患者さん～ ダン医師の回診に病棟を同行しました。小さなこどもが反応してくれます。結核病棟では中高生ぐらいでしょうか。手話でサインを送ると笑顔付きでサインを返してくれます。十分な医療器具・機材が整備されているわけではありませんが、ここでは何よりもダン医師をはじめスタッフ・ボランティアの皆さん自身が患者さんの安心に繋がっていると思いました。

海外青年協力隊～ 現地で活動する皆さんとの交流と懇親会がありました。日本人の誇り、互いを知る、人とのつながり、日本の再発見・・・と国際協力について熱き思いをエネルギーギッシュに語られました。大丈夫、大丈夫！！東ティモール・日本。

ファトボル村（移動診療）、HOPE（孤児院）～ どの子も笑顔がすごくいい。



手話で「I Love You」
みんな笑顔でつながります

今回もいろんな場所でいろんな方々と出会いました。どこも心地いい・気持ちうきうきする出会いばかりでした。今、私の日常ではこうした機会を得られているだろうか？

出会いはこうした心地いいことから始まりたいもの、何か日本では感じられないものがここ東ティモールにあります。

また、会いましょう。皆さん！！